

標準ドイツ語の収束と分散

— 標準変種の確立と脱標準化に関する考察 —

Divergenzen und Konvergenzen im Deutschen —Überlegungen zu Standardvarietäten und Destandardisierungen

高橋 秀彰

TAKAHASHI Hideaki

Nach der erfolgreichen Kodifizierung der deutschen Sprache seit dem Ende des 19. Jahrhunderts sind in der Gegenwart widersprüchliche Tendenzen, Divergenzen und Konvergenzen der Sprachnormen, zu beobachten. Ein Grund für dieses Phänomen liegt in den Beziehungen zwischen den deutschsprachigen Ländern, vor allem in der Distanzierungspolitik Österreichs und der Schweiz gegenüber Deutschland, das wegen des Nationalsozialismus mit Schuld beladen erscheint. Das darauf beruhende, verbreitete Konzept der Plurizentrität fördert die Diversifikation der Sprachnormen. Um differierende Sprachnormen umstrukturieren zu können, müssen aber Abgrenzungsmöglichkeiten zwischen Standard und Nonstandard ermittelt werden. In der vorliegenden Arbeit werden die Erkenntnisse einiger empirischer Untersuchungen über Sprachvarianten herangezogen, um einige Variantentypen zu erörtern und auch über die Bedeutung der heutigen Destandardisierungsphänomene zu ermitteln.

キーワード

標準化 (Standardisierung)、脱標準化 (Destandardisierung)、変異形 (Variante)、標準変種 (Standardvarietät)

1. 序

19世紀末から行われてきた現代ドイツ語の標準化は成熟期に入っていると見られるが、当初から問題になっていた多様性の記述法についてはまだ多くの課題が残っている。近代国家の形成に伴う言語の標準化作業はドイツの主導により進められたことから、ドイツのドイツ語がドイツ語圏全体を代表するという単一中心地的言語観が支配的であった。しかし、標準語 (= 標準変種) は国のアイデンティティを担う機能をも担っており、多様性を排除することを目指し

て推進されてきた標準化が方向転換を迫られるのは時間の問題であった。国際関係の状況によってドイツ語圏諸国は複雑に接近と離反を繰り返し、その都度オーストリアやスイスはドイツからの距離感を調整する言語政策を採ってきた。第2次世界大戦後はドイツからの離反が言語政策に反映されて、オーストリアでは独自の標準変種の確立に向けて精力的な研究が行われた。1980年代ごろからは広く普及した複数中心地的言語観が言語規範の多様化に拍車をかけ、多くの変異形が記述されるようになっていく。しかし、標準変種と非標準変種とを峻別するのは容易ではなく、更なる研究が必要だ。多くの場合にはその区別が可能であるが、標準変種の使用が期待されるような場面においても、区別の判断が難しい変異形がしばしば使われている。本稿では、これまでに行われた変異形研究の中から、実証的調査による研究を振り返り、それらの研究結果を総合的に考察することで、標準変種記述に向けて解決すべき問題点を明らかにすることを目的とする。

2. 変異形の比較、調査対象の検討

ドイツ語の変異形を記述したものとしては、Siebs (1969) が先駆けとして挙げられるが、その後は *Duden Deutsches Universalwörterbuch* (以下、Universalwörterbuch)、*Duden Die deutsche Rechtschreibung* (以下、Rechtschreib-Duden) などにも国・地域の変異形が記述されるようになってきている。国別標準変種に特化したものとしてはEbner (1998)、Meyer (2006) が代表的で、オーストリア公認の *Österreichisches Wörterbuch* (以下、オーストリア辞典) も重要である。しかし、これらの辞典や文献が何に基づいて変異形の記述を行っているかは記されておらず、著者が2次文献や自らの言語直感に頼りながら行っていると推測される。いかなる実証研究に基づいているかが不明であるからといって、多くの批評に耐えながら影響を及ぼしてきた重要な文献であることにはかわりはない。ここでは変異形を実証的に調査した研究を取り上げて、標準化と脱標準化の関係を踏まえて考察したい。変異形を広範に調査した研究はあまり多くないので、König (1989)、Takahashi (1996)、Spiekermann (2005) を取り上げる。König (1989) は標準発音を広域で調査した研究として今日でも基本文献として引用されることが多く、Takahashi (1996) はEbner (1998) やオーストリア辞典などでも参照されているため検討したい。Spiekermann (2005) は標準変種の通時的変化をデータベースを利用して脱標準化傾向を取り扱っている画期的な研究である。本節ではこれらの調査結果を概観した後、変異形記述の可能性を模索したい。

2.1 König (1989)

標準変種の発音調査を広範に行った研究として、König (1989) は金字塔と位置づけることがいえよう。「標準ドイツ語」(Schriftdeutsch¹⁾) が実際にはどのような発音形式として実現

されているかを、旧西ドイツで調査したものである。標準発音の模範話者²⁾としては一般にニュースのアナウンサーが挙げられるが、少なくともギムナジウム³⁾までの教育を受けた平均的な話者が標準発音を、どのように実現しているかが示されている。被験者はアウクスブルク大学とフライブルク大学の大学生44名であるが、出生地とアビトゥーア取得の場所が同じで、少なくとも片方の親がアビトゥーアを取得していることが条件になっている。

調査対象となった変異形は母音が12、子音が15、接辞〈ver-, zer-, er-, -e, -er, -en, -el〉である。本稿ではその全てを参照することができないので、Spiekermann (2005) (次節参照)でも確認された変異形を中心に概観してみたい。

狭母音[e:]が広母音[e:]に変わる形(〈r〉の前は除く)(例、*Regen*, *Lehm*)は全域で確認されているが、南部地域(ヴュルツブルク50%, シュトゥットガルト35%, ウルム55%, トゥットリンゲン80%)での頻度が高くなっている(Bd. 2: 107)。*[ʌ]*が母音間で〈-e, -er (n), -ig, -isch〉の前に現れる際に軟音化する形は、北部のハーメルン(45%)が最も高く、これに南部のアウクスブルク(35%)、フライブルク(30%)が続いている(Bd. 2: 275)。この変異形頻度は高くないものの南部に幅広く広がっている。*/s/*が口蓋化して*[ʃ]*になる形は、南西部のオフエンブルクで散発的に確認される程度である(Bd. 1: 97)。

〈ch〉で*[ç]*が*[ʃ]*になる事例として*China*と*Chemie*を見てみたい。*China*では、ノルトホルン、フェヒタ、デュースブルク、ケルン、ズイーゲン、ギーセン、コーブレンツ、ヴィットリヒ、ケーゼルの9地域で*[ʃ]*が確認されている。*Chemie*でも同じく9地域であるが、ケルンがなく、代わりにマインツが入っている。音環境は、狭母音の前の〈ch〉であるためほぼ同じと考えられるので、2地域の入れ替わりがなぜ起こっているのか疑問が生じる。König (1989)では、それぞれの地域に割り当てられた被験者は1名(König 1989 Bd. 1: 161-167)で、合計44地域における発話を基に調査を行っている。つまり、一人の発音がそれぞれの地域の発音を代表することになる。そのために、〈ch〉の例で見られるような限定的な地域での相違が、地域的な特徴なのか個人的特徴なのかを判断するには更なる調査が必要だろう。調査方法にこのような限界があるとはいえ、被験者の誕生地や学歴に加えて、親の学歴まで統制しながら行われた調査結果は貴重であることにはかわりはない。Königが調査で確認された全ての変異形を標準変種とみなしていることは書名⁴⁾に表れている。

2.2 Takahashi (1996)

Takahashi (1996)は、言語規範を作成する際に重要な役割を果たす模範話者の発音を成文規範との関係の中で考察している。複数中心地的言語としてのドイツ語に照準を合わせているため、主要なドイツ語圏であるドイツ、オーストリア、スイス3カ国における公共放送(ARD、DRS、ORF)におけるニュースのアナウンサーの発音が調査の対象である。ここでは、成文規範から逸脱している変異形を国別に振り返ってみたい。

ドイツ (ibid.: 176 f.)

ドイツのアナウンサーは成文規範に極めて近い発音形式を使用しており、逸脱形式はほとんど見られなかった。

- (1) 有声音 [z] が無声軟音 [ʒ] になる。(例) *Poesie, Sie*
- (2) 鼻音や側音の後でも音節子音が生じる。(例) *ihnen, Innenausschuß, Solingen, sollen*
- (3) アクセントの無い音節でr音が脱落するか母音化される。(例) *protestieren*
- (4) その他の個別ケース

Bosnien の 〈s〉が有声化して、[ˈbɔsn̩ən] が [ˈbɔzn̩ən] になる。

Diskussion の 〈ss〉が有声化して、[diskuˈʃjɔn] が [diskuˈʒjɔn] になる。

Rechtsextremenszene で 〈s〉が脱落して、[-stʃe:nə] が [-tʃe:nə] になる。

オーストリア (ibid.: 170 ff.)

母音

- (1) 二重母音

〈ei〉[ai]が[ej]になる。(例) *Zeit*

〈eu〉[ɔy]が[ɔɐ]になる。(例) *heute* [hɔɐtə], [ˈhø:te]

- (2) 狭母音

- (2. 1) 長母音

広母音[e:]が狭母音[e:]になる。(例) *erklärte*

- (2. 2) 広母音[i,e,y]が狭母音[i,e,y]になる。(例) *Ende, dürfte*

- (3) 長母音が短母音になる。

- (3. 1) 個別の例: *nun, Fabrikarbeiter*

- (3. 2) 縮約

- (3. 2. 1) 冠詞が極端に短くなる。(例) *die Amerikaner* [dameɪkane:], *die USA* [ˈdu:esa:], *in einer* [ˈinə], *ein Frieden* [ənˈfri:dn̩]

- (3. 2. 2) 接尾辞 〈-er〉が極端に短く[ɐ]のように発音される。(例) *linker, seiner*

- (4) アクセントの無い音節末の-e [ə]が、[ɛ]や[e]になる。(例) *eine* [e] *schlechte* [e] *und zwei gute* [ɛ] *Nachrichten*

- (5) その他、広母音 (例) *abzuhalten* [ɔ], *genommen* [geˈnɔmən]

子音

- (6) [k] と [g] が母音や促音 [ɪ] の前で口蓋化する。(例) *klar, keine, Gletscher, vergleicht*

- (7) 接尾辞 〈-ig〉の摩擦音が閉鎖音として[ɪk]のように発音される。(例) *gleichzeitig, vorläufig, zweiundzwanzig*

- (8) 〈ch〉が狭母音や子音の後でも、硬口蓋音[ç]でなく軟口蓋[x]になる。(例) *Kirche*, *durchführen*, *durchaus*
- (9) 有声音 [z] が無声軟音 [ç] か無声音 [s] になる。(例) *seit*, *Somalia*, *Siemens*, *Symposium*
- (10) 無声音 [t] が語末や弱音節で無声軟音 [ç] になる。(例) *Zeit im Bild*
- (11) r音が歯茎弾音[r]か口蓋垂顫動音[R]で調音される傾向がある。(例) *Rest*
- (12) まれに発芽子音が発生する。*wahrscheinlich* [va:'ʃe:ntliç] (内務大臣の発話より)
- (13) アクセントのない音節で[l]や[r]が脱落するか母音化する。(例) *Landesschulrat*, *Uraufführung*
- (14) 声門閉鎖音が語・音節境界、語と語の間で脱落する。(例) *als einer* [al'ze:nə], *steht offenbar* [ʃte:'dɔfənbax], *gab es* [gabes]
- (15) 話の流れを区切るために文と文の間などで休止がおかれるべきところで、休止がない。
(例) „In Somalia macht die UNO jetzt Jagt auf Rebellenführer Aidid. Er soll vor Gericht gestellt werden.“

スイス (ibid.: 174 f.)

母音

- (1) 長母音の[e:]が二重母音化して[eə]のように発音される。(例) *Tätigkeit*
- (2) 二重母音[ɔχ]が[œ]のように発音される。(例) *heute*
- (3) 広母音[i,e,u,v]が狭母音[i,e,u,y]になる。(例) *Journalistin*
- (4) 〈y〉が[i]と発音される。(例) *dynamisch*
- (5) 〈ä〉[e,e:]が[œ,æ:]のように発音される。(例) *erkläre*, *Schäden*
- (6) アクセントの無い音節末の-e [ə]が、[e]や[e]になる。(例) *neue Produkte*

子音

- (7) 接尾辞〈-ig〉の摩擦音が閉鎖音として[ɪk]、[ɪg]のように発音される。(例) *nötig*
- (8) 〈ch〉狭母音や子音の後でも、硬口蓋音[ç]でなく軟口蓋[x]になる。(例) *durch*
- (9) 有声音[z]が無声軟音[ç]か無声音[s]になる。(例) *Sie*, *sogar*
- (10) r音が歯茎弾音[r]か口蓋垂顫動音[R]で調音される傾向がある。(例) *Burghardt*
- (11) アクセントのない音節で[l]や[r]が脱落するか母音化する。(例) *in unserer Sendung*, *Basler* [ba:sə]
- (12) 声門閉鎖音が語・音節境界、語と語の間で脱落する。(例) *verantwortlich* [fe'rantvortliç], *Er habe* [e'abe]
- (13) その他 (例) *Strategie* [strate'gi:]

ニュースのアナウンサーの発音には成文規範からの逸脱が極めて少ないことはLameli (2004: 85 f.) においても報告されているが、この解釈はオーストリアとスイスのアナウンサーの発音には当てはまらない。その理由はドイツの発音を中心に記述した発音辞典しか刊行されていないためであり、そこから逸脱するのは当然のこととも考えられよう。このこと自体が複数中心地的言語観の根拠の一つにもなっており、変異形辞典 (Ammon et al. 2004, *Varietätenwörterbuch*) の刊行へとつながっている。「逸脱」は基準に適合していないことを意味し、本来はその基準に合わせるべきであるという含意がある。しかし、オーストリアとスイスの模範話者がドイツで編纂された発音辞典に依拠しなければならないという理由はなく、本調査結果も踏まえてそれぞれの国の標準変種を記述する必要がある。オーストリア放送で発音指導を担当している Wächter-Kollpacher (1995: 273) は、オーストリアのラジオやテレビ放送で求められているドイツ語は、いかなるレベルにおいてもドイツのドイツ語ではないと指摘しているが、今日に至るまでこの問題は続いている⁵⁾。

2.3 Spiekermann (2005)

Spiekermann (2005) はコーパスを利用してバーデン・ヴュルテンベルク州における発音変異形の経年変化を調査している。Pfeffer-Korpus (1961) は1件あたり12分の録音が398件収録されているものである。その中からインタビューで、教育程度が高い被験者の結果を分析対象として抽出している。被験者は、カメラマン (専門学校卒)、画家 (大卒)、生徒、大学教授、秘書、大学生である。もう一つはSüdwest-Standard-Korpus (2001-2003) で、教員と教員志望の大学生を被験者としたものである。調査の結果、2つのコーパス間で相違が見られ、Südwest-Standard-Korpusで標準形式から統計上有意の逸脱が見られのは次の形式であった。

A. 方言の特徴が話しことばの標準形式では減少している

1. 硬口蓋無声摩擦音 [ç] が舌先化して [tʃ] になる。例えば、*dich* [dɪç] が [dɪtʃ] になる逸脱で、ライン・フランケン方言圏のハイデルベルクにおける減少傾向は有意 ($p \leq 0.001$) である。
2. 前舌半狭母音 [e:] が半広母音 [e:] になるもので、*lesen* 前舌半狭母音 [e:] が半広母音 [e:] になる。シュヴァーベン方言の典型的な特徴である。シュトゥットガルト ($p \leq 0.001$) とハイデルベルク ($p \leq 0.05$) の結果で有意な減少傾向を示している。
3. [s] が口蓋化して [ʃ] になる。例えば、*fest* [fest] が [feʃt] になるもので、シュトゥットガルトで有意な減少傾向 ($p \leq 0.001$) が確認されている。
4. 母音間で硬音が軟音にかわり、*Mutter* [mʊtɐ] が [mʊdɐ] になる逸脱で、シュトゥットガルト、ハイデルベルク、フライブルクで有意な減少傾向 ($p \leq 0.001$) が確認されている。
5. 母音の後に <r> が続く音節でr音が脱落して単モーラ化する現象で、例えば *Sport* [pɔrt] が [pɔt] になる逸脱は、ハイデルベルクで有意 ($p \leq 0.01$) な減少傾向が確認されている。

B. 超地域的な非標準形式が増加している例

6. シュワー[ə]が脱落し、*ich gehe*が*ich geh*になる逸脱は、シュトゥットガルト、ハイデルベルク、フライブルクで有意な増加傾向 ($p \leq 0.001$) が見られる。
7. 語尾の [t] が脱落して *ist* [ɪst]が[ɪs]になる形で、シュトゥットガルト、ハイデルベルク、フライブルクで有意な増加傾向が見られる ($p \leq 0.001$)。
8. 7同様に語尾の[t]が脱落して *nicht* [niçt]が[niç]になる形で、ハイデルベルク、フライブルクで有意な増加傾向が見られる ($p \leq 0.001$)。
9. *Er hat es*が*Er hats*になるように接語的 (klitisch) な *es* が使用される形式は、シュトゥットガルト ($p \leq 0.01$)、フライブルク ($p \leq 0.05$) で有意な増加傾向が見られる。
10. 不定冠詞 *eine* が *ne* に短縮される形は、シュトゥットガルト ($p \leq 0.001$)、ハイデルベルク ($p \leq 0.01$)、フライブルク ($p \leq 0.001$) で有意な増加傾向が見られる ($p \leq 0.001$)。

C. 方言の特徴が増大している例

11. *das* [das]が方言の影響を受けて[dəs]になる形は、シュトゥットガルト ($p \leq 0.001$)、ハイデルベルク ($p \leq 0.05$) で有意な増加傾向が見られる。
12. *nicht* [niçt]が方言の影響を受けてが[net]になる形は、フライブルク ($p \leq 0.05$) でのみ有意な増加傾向が見られる。

減少幅が最も大きい変異形は硬音の軟音化で、シュトゥットガルトでは56.5%が9%に、フライブルクでは70%が21.5%へと大幅に減少している。また、前舌半狭母音[e:]が半広母音[ɛ:]になる現象では、シュトゥットガルトで41.5%から14%へと減少し、硬口蓋無声摩擦音[ç]が舌先化して[ʃ]になる現象はハイデルベルクで59.5%から32.5%へとほぼ半減している。母音の後に <r> が続く音節でr音が脱落して単モーラ化する現象では減少幅が少なく、Südwest-Standard-Korpus (2001-2003) においても2割前後の頻度で確認されている。

非地域的な逸脱形式については、シュワー[ə]の脱落の頻度が極めて高く3地域で8割程度になっている。語尾の[t]が脱落する現象は増加し、*ist* [ɪst]が[ɪs]になる逸脱と *nicht* [niçt]が[niç]になる逸脱共に5割から8割強までの頻度で確認されている。

方言の特徴が増大している例では、*das* [das]が[dəs]になる形がシュトゥットガルトで7割程度の頻度で確認され、ハイデルベルク (22%) とフライブルク (37%) を大きく上回っている。*nicht* [niçt]が[net]になる形はフライブルクで有意であるものの、頻度は8.5%とわずかである。

以上より、地域方言の特徴が標準変種の使用時に混在する例は、40年間の間に減少傾向を辿っていることが確認されている。Spiekermannでは2つのコーパス間にどれほどの有意差があるかが示されているが、実際に使用される頻度がきわめて重要と考えられる。頻度が高くなけ

れば、両コーパス間に有意差があっても、当該の地域における特徴的な標準変種からの逸脱と
 は言い難いからである。Aに区分された変異形の中で Pfeffer-Korpus (1961) で頻度が高かつ
 た変異形は、[ç] の舌先化 (ハイデルベルクで59.5%)、硬音の軟音化 (フライブルクで70%、
 シュトゥットガルトで56.5%) である。硬音の軟音化は、上述の通り2003年には大幅に減少し
 ているので、標準変種への収束が顕著であることがわかる。[ç] の舌先化についても2003年
 には、ほぼ半減しているものの三分の一の事例で確認されているので、ハイデルベルクにおけ
 る特徴的な変異形ということができよう。Aと比べてBに区分された変異形の頻度は際立って
 いる。2003年の頻度を見ると、シュワアの脱落は3地域で8割以上、語尾 [t] の脱落は3地
 域で5割から8割、接語的な *es* は5 - 6割、不定冠詞の縮約は4割 (ハイデルベルク) から
 8割強 (フライブルク) となっている。Cに区分された変異形では、*das* [das]が[des]になる
 逸脱で、シュトゥットガルトで7割程度と高くなっているが、他の地域では4割以下に過ぎな
 い。*nicht* [niçt]が[net]になる逸脱にいたっては10%を少し超える程度で、目立った特徴とは
 考えにくい。以上の考察から、非地域的な逸脱形式が著しく増加しているが、地域方言の特徴
 は標準変種中で減少傾向にあるとまとめることができよう。

3. 発音変異形の標準と非標準に関する考察

脱標準化との関連で以上の音声特徴を考察してみたい。ドイツの模範話者は成文規範からの
 逸脱は極めて少なく、成文規範に準拠していることがわかる。逸脱している音声は、いずれも
 地域的特性を帯びたものではなく、調音時の縮約によるものばかりである。*Duden Das
 Aussprachewörterbuch* (2005) (以下 *Aussprache-Duden*) では母音の前の ⟨s⟩ は有声と規定
 されているが、*Großes Wörterbuch der deutschen Aussprache* (以下 *GWDA*) (1982: 72) に
 よると、s音は完全な発声開始時では有声性の喪失により軟音化が観察され、有声性を誇張し
 ようとすると逸脱形式のように感じられるとしている。このように発音辞典間においても差異
 があるのは、*GWDA*が音声学的により精密な説明をしているからである。音響音声学上の有
 声性を確保するにはVOT (voice onset time) が摩擦より先でなければならないが、自然な速
 さの発話で完全にVOTを制御するのは困難である。したがって、ある程度の有声性喪失は自
 然な発話では当然の現象と言わざるをえない。音節子音についてはどのように規定されている
 のだろうか。*Aussprache-Duden* (2005: 39 f.) と *GWDA* (1982: 35 f.) のいずれもが、母音や
 側音、鼻音、r音の後での音節子音 [l, m, ŋ] を容認しておらず、[əl, əm, əŋ]と発音すべきこと
 が記されている。母音や側音、鼻音、r音は鳴音 (sonorant) のため、その後さらに音節子
 音が続くとも鳴音が連続することになるので、発音が不明瞭になるのを避けるための規定と考え
 られる。しかし、現実には他の子音と区別して鳴音の場合にだけ音節子音化を避けるには、特
 殊な訓練をしなければ困難だろう。*Aussprache-Duden* (2005: 67 f.) では、鳴音以外の音節子

音化の回避は「朗読や騒々しい環境、話者と聴者との距離が離れている時」などでの発音であるとしている。鳴音以外では音節子音化が無標であるなら、なおさら音節子音化を意識することになるので鳴音も同様に調音する傾向は高くなると考えられる。

r音については、音節を形成するか否かに関わらず母音の前では子音[r,R,ʀ]で発音すると規定されている (Aussprache-Duden 2005: 54, GWDA 1982: 52)。実際には口蓋垂摩擦音で調音されることが多いので、弱音節では慎重に調音しなければ脱落してしまう。その他の個別ケースについては外来系の語彙で発音にゆれが見られる。*Bosnien*の〈s〉の有声化 ([ˈbɔznɪən]) は英語 (Bosnia [ˈbɔznɪə]) の影響ではないかと思われる。*Diskussion* [dɪskʊˈʃiɔn]の [s] が有声化して[dɪskʊˈʒiɔn]になる例については、母音の前に来るs音は有声音であるというドイツ語の正音法に基づく過剰訂正の可能性があるだろう。ただし、2音節目の〈ss〉がより強く意識される*Mission*、*passieren*などでs音が有声化する事例はない。*Rechtsextremenszene*で [s] が脱落して、[-stʃemə]が[-tʃemə]になるケースはどうだろう。ドイツ語では外来語を除いて語頭に[stʃ]が来ることはないため、誤ってドイツ語化した[tʃ]で置き換えられているのではないか。いずれにせよ、ここで挙げた逸脱の原因については、さらなる実証研究により検証する必要がある。以上のように、ドイツの話者においては、逸脱が限定的であり、その多くが調音時の縮約によるものであることから、地域性を反映した脱標準化の兆候は見られない。

オーストリアとスイスにおいても成文規範への志向性は高いものの、逸脱形式が少なくないことから、ドイツとは異なる規範意識が作用していると考えられる。オーストリアとスイスでは、母音の逸脱が二重母音、長母音・短母音共に特徴的で、全体の聴覚印象に大きな影響を及ぼしている。国・地域別の変異形記述を意欲的に推進しているオーストリア辞典やMayer (2006)、Siebs (1969) などでも母音の変異形については慎重で、Takahashi (1996) で報告されているような形式は一切記述されていない。母音については、辞典類は全て共通の規範を求めており、この点はオーストリアやスイスなどドイツ以外でも同じである。国別の成文規範において違いがあるのは長音・短音の区別に集約される。オーストリアでは、ドイツでは聞かれない極端な縮約が確認されており、冠詞の縮約では母音がほとんど脱落するほどである。広母音[i,e,u,y]が狭母音[i,e,u,y]になる形は、オーストリアとスイスに共通の特徴である。オーストリアでは、二重母音〈ei〉[ej]と狭母音が全体として特徴的な響きを作っているといえよう。子音を見ると、〈-ig〉(閉鎖音[ɪk], [ɪŋ])、〈ch〉(狭母音や子音の後での[x])、s音(母音の前での無声化)、r音(歯茎弾音[r])など、オーストリアとスイスでは共通する特徴が多数見られることわかる。この中で特にr音については考察が必要である。Aussprache-Duden (2005: 53 f.)によると、訓練を受けたテレビ・ラジオのアナウンサーや俳優、映画の発話などでは摩擦音[ʀ]が使われ、歯茎弾音[r]は歌曲で使用されられている。しかし、伝統的な歯茎弾音と並んで、口蓋垂顫動音が使われ始めたのは18世紀ごろのことで、17世紀初頭からパリなど大都市で使われたものがドイツに流入してきたものである (Trautmann 1903: 97 ff.)。従って、オ

ーオーストリアやスイスで特徴的な歯茎弾音は、今日の正音法では一般的な調音法とは見なされていないが、伝統的な調音法であり、Siebs (1969: 84) においては口蓋垂音より舌尖音を優先すべきであると記述されている。

〈-ig〉中の〈g〉が摩擦音と規定されている点も問題を孕んでいる。ドイツ中・北部の発音を基準にしてSiebsが摩擦音を採用したのは、正音法会議における多数決で僅差で摩擦音に決められたためであった (Winkler 1954/55: 323)。しかし、〈-ig〉の後に母音が続くと閉鎖音で調音しなければならない (例、Königin [kø:nigɪn])。また、後ろに摩擦音が来る場合は、摩擦音の重複を避けるために閉鎖音に変えるという規則がある。Aussprache-Duden (2005: 84) によると、語末の〈-ig〉では、König [kø:nɪç] ledig [le:ɪç]のように摩擦音であるが、次の音節に摩擦音が含まれるとKönigreich [kø:nɪkraɪç]、lediglich [le:ɪdɪçlɪç]のように閉鎖音として調音されることになっている。当初は摩擦音を採用していたが、摩擦音が2音節にわたって繰り返されると響きが美しくないため、閉鎖音にするようにSiebs (1969: 113) が規定を修正している。さらにGWDA (1982: 62) がこの規定を採用したものを、Dudenが受け継いでいるのである。母音の前のs音はドイツでは音声環境によって軟音化・無声化することがあるが、オーストリアやスイスなどドイツ語圏南部では音声環境に関わり無く無声音が基本である。模範話者は成文規範に従って有声音で発音する傾向があるものの、ドイツの話者と比べて無声化することが多いところに特徴がある。

4. 標準と非標準の境界について

語彙が辞典に記述されることによって、その正書法や語法、発音などが「正しい形式」と承認されたと一般に考えられがちであるが、記述された全ての語彙が標準変種と承認されたとは限らない。Rechtschreib-Dudenでは、見出し語にその語が使用されている地域・国が記されている (norddeutsch, schweizerisch, österreichisch, ostmitteldeutsch, süddeutsch, mitteldeutsch, ostdeutschなど)。例えば、「肉屋」を表す語をRechtschreib-Dudenと変異形辞典でどのように記述されているかを見ると、5つの語が地域・国別で記されている。

	Rechtschreib-Duden	変異形辞典
<i>Fleischer</i>	(地域・国の記述なし)	オーストリア、ドイツ北部・中部
<i>Fleischhauer</i>	オーストリア	オーストリア
<i>Fleischhacker</i>	オーストリア東部、日常語	オーストリア東部
<i>Metzger</i>	オーストリア西部、スイス、ドイツ中西部・南部	オーストリア西部、スイス、ドイツ中西部・南部
<i>Schlachter</i>	ドイツ北部	ドイツ北部・中西部

Rechtschreib-Dudenによると、*Fleischer*には特記事項が全くなく共通ドイツ語として扱われているのに対して、変異形辞典では「オーストリア、ドイツ北部・中部」と記されている。

変異形辞典の記述では、*Fleischer*と*Fleischhauer*の両方がオーストリアで使われ、*Fleischhacker*と*Metzger*がそれぞれオーストリアの東部と西部に限定された変異形ということになる。そうするとオーストリアの東部と西部でそれぞれ合計3通りの変異形が使われることになる。変異形辞典では、それぞれが対等の変異形として記述されているが、どのように使い分けられているかは不明である。変異形辞典によると、*Holzfäller* (木こり)は共通ドイツ語で、*Holzhammer*はオーストリア、スイス、ドイツ南部と記されておりドイツ語圏南部全域で使われる形である。Rechtschreib-Dudenでは、*Holzfäller*が無標形で、*Holzhammer*には「特にオーストリア」と記されている。他方、変異形辞典で*Spazierstock* (散歩用ステッキ)は共通ドイツ語で、*Handstock*はドイツ北部になっているが、Rechtschreib-Dudenでは*Spazierstock*が無標形として記述されていて*Handstock*は掲載されていない。このように変異形が複数ある語の場合には、中立的な共通ドイツ語を規定するのは容易ではなく、Rechtschreib-Dudenがどのような基準に従って無標形を規定しているかについては調査が必要である。

上記に挙げた語は、変異形辞典では全て標準変種と位置づけられている。標準変種との認定が難しい語については「標準との境界例」(Grenzfall des Standards)と記されている。例えば、*Frauerl* (オーストリア、「犬の飼い主 (女性)」)、*Herrl* (オーストリア「犬の飼い主 (男性)」) (それぞれ共通語は*Frauchen*, *Herrchen*)、*kleinweis(e)* (オーストリア、ドイツ南東部「少しずつ」) (共通語*Schritt für Schritt*)、*Nana* (リヒテンシュタイン「おばあちゃん」) (共通語*Oma*) など多数記載されている。

オーストリアでは、ドイツ南部と同様、方言と標準語の間には連続体があって、両極でのみ明確な発音や文法の規則が存在しており、それらの間にある領域は「日常語」(Umgangssprache)と考えられている (Ammon et al. 2004: XXXVI)。レジスターの変化は、話者により様々であるが、社会的・地域的出自、教育程度、場面、相手、テーマ、感情、スタイルなど多くのパラメータにより決まるとしている。方言と標準語の連続体は、フォーアアルベルク州のように方言と標準語の違いがはっきりしている地域には存在しない。

スイス (Ammon et al. 2004: XL) ではダイグロシア状況が支配的なので、方言と標準語の間に連続体は存在せず、標準語から超地域的な日常語が生じることはない。しかし、方言と標準語の間で双方の干渉があることから、明確に方言と標準語とを区別する基準を作るのは容易ではない。例えば、方言から標準変種に入った語として*Plättli* (「陶磁器の皿」、共通語*Keramikplatten*) が挙げられる。また、形式上は明確にスイス方言の特徴を持っていないが、ドイツ語圏全体で使われている語に*Müesli* (*Müsli*) がある。外形上は地域性が目立たないが、多くのドイツ語教師が標準語が使用されるテキストでは受け入れられないと判断する語として、*erlicken* (「見つけ出す」、共通語*herausfinden*)、*blutt* (「裸の、むきだしの」、共通語*nackt*)、*Finken* (「スリッパ」、共通語*Pantoffel*) などがある。変異形辞典では形式的な基準

を設けず、標準的な文献や地理的な広がり、社会的・文体的特徴、従来の辞典における評価、規範権威者や模範話者による評価、模範テキストでの使用など多面的な要素を考慮している。

ドイツ (Ammon et al. 2004: XLVI) の場合は多様な方言圏が広がっているので、日常語の定義から始めている。オーストリアの考察で採用したような、方言と標準語の間にある言語相という定義を採ると、ドイツ南部の日常語は方言ということになってしまう。そこで、方言であれ標準語であれ、日常の交流で支配的な言語形式を日常語と定める第2の定義を掲げている。実際には、標準語のテキストに日常語を含めることによって、書きことばを生き生きさせる傾向が今日では広まっていることもあり、標準語と方言を明確に区別するのは困難であるとしている。そこで変異形辞典では標準の境界事例という範疇を設けて、この領域の語は自由裁量の範囲内であると考えているのである。

変異形辞典に収録する語は国・地域で流通している標準変種であるので、標準形と非標準形を分ける基準を考えなければならない。しかし、方言圏によって日常語と標準語との位置づけや使い方に違いがあり、また方言と標準語の使い分けも多様な要素が絡み合っているため、両者に厳格な基準を設けて区別するのは容易ではないし現実的でもない。それにより、明確に標準変種と認定できない語については標準の境界事例として掲載していく方針を採っている。発音については、変異形辞典の編集委員会独自の調査は行っておらず、従来の辞典類に依拠して記述しているので斬新さは感じられない。

5. 変異形研究への提言と脱標準化の特徴

変異形を積極的に認める傾向が多く辞典類などにも見られるが、中心となる言語範疇は語彙、正書法、文法性 (Genus) であり、発音に関する記述はいずれも限定的である。実際の話しことばは音声を通じて行われるので、発音がきわめて重要であるのは当然であるが、なぜ音声の変異形は部分的にしか取り上げられていないのだろうか。語彙や正書法、文法性は、調査を通じて明確な尺度で分類、記述することが可能であるのに対して、音声調査を遂行するには、音声学の素養が不可欠であるという条件がある。また、閉鎖音と摩擦音など明確な尺度で分類できる場合もあるが、有声性や母音など変異が連続体を成している領域では分類・記述が容易ではない。利用者の視点から見ると、音声表記で記述される発音を理解するには音声表記の学習が必要になってくることから、音声の精密表記への需要は大きくない。これらの要因によって、多くの辞典類における発音記述は発音辞典に依拠していて、発音の変異形記述は限定的になっている。最も代表的なドゥーデン編集部による発音辞典も編集部には音声学者がいないため、初版 (1962年) から最新の第6版 (2005年) に至るまで、サールブリュッケン大学の音声学教授 Max Mangold 教授に一任してきた。今後は、ドゥーデン編集部と国際的な音声学チームが共同プロジェクトを組むなどして、標準形と標準の境界事例に関する調査を推進することが

望まれよう。

オーストリア辞典の編者の一人である Otto Back は、[i,ɛ,ʏ] が [i,e,y]、アクセントの無い音節末の ⟨-e⟩ [ə] が [ɛ] や [e]、接尾辞 ⟨-ig⟩ の摩擦音が閉鎖音として [ɪk]、有声音 [z] が無声軟音 [ʒ] か無声音 [s]、無声音 [t] が語末や弱音節で無声軟音 [d]、オーストリアの標準変種と考えるべきと主張をした (Takahashi 1996: 173)。[i,ɛ,ʏ] と [i,e,y] は相補分布をなしており、示差的特徴としての機能は担っていないので、[i,ɛ,ʏ] を使わなくても音素認識の際に誤解は生じない。また、音節末の ⟨-e⟩ が [ɛ] や [e] になる形も、[i,ɛ,ʏ] が [i,e,y] になる形と同じく、狭母音化の規則に拠っており、Bürkle (1995) もオーストリア標準変種の音韻規則に位置づけることを提唱している。[ø] が [œ] になる形も加えて、[i,ɛ,ʏ,ø] が [i,e,y,œ] に狭母音化することで、音韻体系が簡素化することにもなる。ドイツ語圏南部で一般に使われている接尾辞 ⟨-ig⟩ [ɪk] は、閉鎖音で一貫させる方が音韻体系の規則化が容易にもなる。母音の前に来る ⟨s⟩ については、Siebs 規範にオーストリアの特徴を補足するために出版された Österreichisches Beiblatt (1960: 158) において、フォルクスシューレ (Volksschule)⁶⁾ では有声音をまだ要求できないが、上位の教育機関では「高尚な講演語」(gehobene Sprache des Vortrags) のために有声音を習得すべきとの立場をとっている。しかし、s 音については今日に至るまで有声音と無声音の揺れが続いており、有声音が完全には受容されていない状況を考えるならば、無声音を標準変種に位置づけるのは妥当と思われる。弱音節における [t] の無声軟音化は慎重な検討を要する。無声軟音化の程度に幅があるばかりでなく、語中や語尾では音声環境に起因する無声軟音化が生じる (GWDA 1982: 72) ので、オーストリア変種と規定するのは適切ではなく、程度の大きい無声軟音化については標準の境界事例と位置づけるのが妥当であろう。その他に、高母音の前に来る ⟨ch⟩ [ç] が [k] になる形 (例、*Chemie*) は Siebs 規範でもオーストリア変種と記されているように、標準変種と見なすことができよう。[ç] が [x] になる形 (例、*durch*) は、従来の辞典類では認められていないが、オーストリア変種と認めることにより現実を反映する時期に来ている。母音については変異形の認定に慎重であるが、二重母音 [aj] が [ej]/[ɔ] に変わる形はオーストリア変種のシボレスとも言える形式であり標準変種と容認できるとと思われる。

スイスの変種については、さらなる検討が必要である。オーストリアでは政府公認のオーストリア辞典を刊行するなど、意欲的な言語政策を展開しているので標準変種の認定に関する研究は不可欠である。スイスでは積極的な言語政策は見られず、スイス人自身が独自の標準変種確立を欲しているかも定かでない。しかし、スイス人にとって、標準変種での発話が求められる場合に不慣れなドイツ標準変種に依拠するのは心理的にも能力的にも障壁があり、スイス標準変種の確立は有用であろうと考えられる。また、Universalwörterbuch や Rechtschreib-Duden でも各種の変種に関する情報を記述しているが、これはスイスでドイツ語を使用する外国人にとっても有益な情報といえる。Takahashi (1996) で確認された発音変異形を見ると、スイスとオーストリアには共通の形式がいくつか存在する。これらについてはオーストリア標

標準変種の認定について上述した観点から判断して、スイス標準変種と認めることもできようが、そのためにはスイス人の態度研究による補完が必要である。

さらに本稿での考察を通じて、標準変種の具現化が、話者のレベルにより異なることも明らかになった。ドイツにおける調査に限定して、模範話者を対象とするTakahashi (1996)と教育を受けた一般話者を対照とするKönig (1989)を比較すると、その間に大きな乖離があることがわかる。ドイツの模範話者は、職務上規範典に従うことが求められており、発音辞典からの逸脱は極めて限定的であった。逸脱の多くは縮約形で、地域性のある変異形は皆無である。König (1989)では、教育を受けた一般的な話者が標準変種を意識して発話する際に、多様な地域変異形が混入することを示している。これにより、ドイツの標準発音には模範話者を頂点とする階層性があり、地域方言に至るまでの間に標準形と地域変異形が混在した中間変種が存在しているということが出来る。この中間変種には地域差が大きく、日常語として一括りにするわけにはいかない。

Spiekermann (2005)による通時的調査では、方言の特徴が増えている事例よりも、方言の特徴が標準形式では減少している事例や、超地域的な非標準形式が増加している例の方が遥かに多いことが明らかになっている。この状況は、地域的な変異形の衰退による平準化傾向と言い換えることができよう。交通網の発達による人の流動性と、公教育による標準語教育を通じて、今日のドイツでは伝統的な地域方言から超地域的な変種へ移行することによる脱標準化現象を示している。脱標準化とは必ずしも標準形式を使用できないという意味ではなく、規範意識の低下により使用しなければならないという意識が低下したということである。地域的な音声特徴が存続していることは言うまでもないが、縮約形などドイツ内で共通の音声特徴が広がりつつある。地域方言の存続は話者が当該地域に感じるアイデンティティと密接な関係があるが、地域的なアイデンティティよりグループのアイデンティティが強まっているというBausinger (1997: 390)の指摘とも符合する。若者が地域を越えた若者ことばにより強いアイデンティティを感じているのはその例であるとする。

超地域的な非標準形式の拡大による脱標準化とは別に、辞典中での国・地域別の変異形記述の増加も、規範の分散という意味で広義の脱標準化と考えることができよう。こうした変異形を国・地域の標準変種と位置づける過程は、新たな標準化でもある。ドイツ語の成文化はいわば爛熟期にさしかかっているといえるが、変種を記述する基盤は未だ磐石とはいえない。記述主義的傾向が強まる中では、特に標準の境界事例に関する実証研究が重要になってくる。中でも、これまで手薄だった音声変異形については未解決の問題が多く、さらなる研究が必要不可欠だ。ドイツ語の標準化は、多様性の中に統一性を見出していくための学問的基盤を構築する新たな段階に入ったといえよう。

注

- 1) この術語の原義は「文章ドイツ語」であるが、König (1989) では „Hochdeutsch “と同義で使っているので本稿では「標準ドイツ語」と訳している。
- 2) Ammon (1995: 80) は、標準変種成立のメカニズムを説明するモデルで、「言語の専門家」(Sprachexperten) と「模範話者・著者」(Modellsprecher/-schreiber)、「言語規範典、規範作成者」(Sprachkodex, Kodifizierer)、「規範権威者」(Normautoritäten) の4者を主要なアクターとしている。
- 3) 4年間の初等教育修了後に続く9年制の中等教育機関のこと。修了試験のアビトゥーア (Abitur) に合格すると大学入学資格が与えられる。
- 4) 『ドイツ連邦共和国における標準語発音地図』(*Atlas zur Aussprache des Schriftdeutschen in der Bundesrepublik Deutschland*)
- 5) その後、オーストリアドイツ語の発音データバンク (Aussprachedatenbank des Österreichischen Deutsch) を基に発音辞典の編纂プロジェクトがグラーツ大学の Rudolf Muhr により遂行され、2007年に『オーストリア発音辞典』(*Österreichisches Aussprachewörterbuch*) (Peter Lang) が刊行された。この辞典では、オーストリア放送の Wächter-Kollpacher などアナウンサーを模範話者として記述している。この辞典の評価とオーストリア放送での使用に適しているかについては、更なる検討が必要である。
- 6) ドイツの Grundschule に相当する。6歳から4年間通う初等教育機関を指す。

引用文献

- Ammon, Ulrich (1995). *Die deutsche Sprache in Deutschland, Österreich und der Schweiz. Das Problem der nationalen Varietäten*. Berlin/New York: Walter de Gruyter.
- Ammon, Ulrich et al. (2004). *Varietätenwörterbuch des Deutschen — Die Standardsprache in Österreich, der Schweiz und Deutschland sowie in Liechtenstein, Luxemburg, Ostbelgien und Südtirol*. Berlin: Walter de Gruyter.
- Bausinger, Hermann. „Dialektverfall oder Mundardrenaissance? — im deutschen Südwesten.“ Hrsg. Gerhard Stickel. *Varietäten des Deutschen — Regional- und Umgangssprachen*. Berlin: Walter de Gruyter, 388-392.
- Bürkle, Michael. *Zur Aussprache des österreichischen Standarddeutschen: Die unbetonten Silben*. Frankfurt a. M.: Peter Lang, 1995.
- Duden. Aussprachewörterbuch* (2005). 6. Aufl. Mannheim/Wien/Zürich: Dudenverlag.
- Duden. Deutsche Rechtschreibung* (2006). 24. Aufl. Mannheim/Wien/Zürich: Dudenverlag.
- Ebner, Jakob (1998). *Wie sagt man in Österreich?: Wörterbuch der österreichischen Besonderheiten*. 3. Aufl., Mannheim/Wien/Zürich: Bibliographisches Institut.
- Großes Wörterbuch der deutschen Aussprache* (1982). Hrsg. Eva-Maria Krech et al. Leipzig: Bibliographisches Institut.
- König, Werner (1989). *Atlas zur Aussprache des Schriftdeutschen in der Bundesrepublik Deutschland*. Hueber.
- Lameli, Alfred (2004). *Standard und Dstandard — Regionalismen im diachronen Längsschnitt*. Wiesbaden: Franz Steiner.
- Meyer, Kurt (1989). *Wie sagt man in der Schweiz?: Wörterbuch der schweizerischen*

- Besonderheiten*. Mannheim/Wien/Zürich: Dudenverlag.
- Meyer, Kurt (2006). *Schweizer Wörterbuch – So sagen wir in der Schweiz*. Frauenfeld: Huber.
- „Österreichisches Beiblatt zu Siebs ‚Deutsche Hochsprache — Bühnenaussprache‘ “ (1960). Hrsg. H. Boor und P. Dieks. 18. Aufl. Berlin: Walter de Gruyter. Abgedr. Hrsg. Gustav Korlén und Bertil Malmberg. *Tysk Fonetik*. Lund: Gleerups, 156-164.
- Österreichisches Wörterbuch* (2006). Hrsg. im Auftrag des Bundesministeriums für Bildung, Wissenschaft und Kultur. 40. Aufl. Wien: öbvht Verlag.
- Spiekermann, Helmut (2005). „Regionale Standardisierung, nationale Destandardisierung.“ Hrsg. Ludwig M. Eichinger, Werner Kallmeyer. *Standardvariation. Wie viel Variation verträgt die deutsche Sprache?* Berlin/New York: 100–125.
- Takahashi, Hideaki (1996). *Die richtige Aussprache des Deutschen in Deutschland, Österreich und der Schweiz — nach Maßgabe der kodifizierten Normen*. Frankfurt a. M.: Peter Lang.
- Trautmann, Moritz (1903). *Kleine Lautlehre des Deutschen, Französischen und Englischen*. Bonn: Carl Georgi's Universitäts-Buchdruckerei.
- Wächter-Kollpacher, Eva (1995). „Die Sprecherschulung im ORF.“ Hrsg. Rudolf Muhr, Richard Schrott und Peter Wiesinger. *Österreichisches Deutsch - Linguistische, sozialpsychologische und sprachpolitische Aspekte einer nationalen Variante des Deutschen*. Wien: Hölder-Pichler-Tempsky, 269-279.
- Winkler, Christian (1954/55). „Die Aussprache des Deutschen: Zur Neuausgabe des ‚Siebs‘.“ *Wirkendes Wort* 5, 321-330.